

鈴木武右衛門先生のご逝去を悼む

久保村 里正

平成 26 年 11 月 29 日、鈴木武右衛門先生が入院先の病院にて、65 歳でご逝去されました。

鈴木先生は今から数年前に肺を患ったことがあり、それ以来、体調管理に気をつけ、かかりつけの病院で定期検査をかかさずうけておられたのですが、秋学期に入り肺の状態が悪化したことがわかり、急遽入院することになりました。その際には、まだ元気なご様子でしたので、これほど早くに旅立たれるとは予想もしておりませんでした。入院後、投薬による治療に専念し病状も安定してきたことから、手術を視野に入れ本格的な治療に望もうとした矢先の出来事でしたので、あまりにも急な出来事であり、今ここに鈴木先生がいないという事実には戸惑い、実感がわきません。

私が鈴木先生に初めてお会いしたのは、まだ大学院生の頃だったかと思います。当時、文教大学でデザインを指導されていた朝倉先生のところへ、投稿論文の相談のために伺った際、美術研究室で新しく赴任した彫刻の先生ということで挨拶をしたのが最初の出会いでした。その当時の美術研究室は年配の先生が多かったのですが、鈴木先生は非常に若くバイタリティ溢れるマイスターといった雰囲気、快活で指導熱心な先生は学生からの人気も高く、その様な先生に指導される学生が羨ましく思えました。実際、鈴木先生が彫刻を指導するようになってから美術専修における彫刻の授業は一変し活気が溢れ、卒業研究でも彫刻を志望する学生が増え、作品のレベルも高くなっていきました。

また学生に人気者のあった先生は、授業以外にも積極的に学生と交わり、教員と学生との距離が近いという、現在の美術研究室の雰囲気を作り上げていきました。これは学生時代に東京造形大学で彫刻家・教育者として著名な佐藤忠良先生に師事した彫刻家の中でも教育的視点を持った作家だったということと、先生の天性によるものだと思います。先生の二人のご兄弟は教員をされている教育者一家だったそうで、以前に「教育一家の変わり者が、美大に進学して彫刻家になったけれども、結局のところ先生になってしまった」と、笑いながらおっしゃったことがありました。そういう意味では、大学で彫刻を指導するという事は、先生にとって天職だったのだと思います。

鈴木先生はここ数年、肺を患い定期的に検査をされていました。先生が肺を患うようになった原因は、学生の頃から続けてきた石彫によって生じる粉塵のせいであり、職業病ともいえるものでした。しかし先生は笑いながら「昔はみんなそんなものは気にしていなかったから」と明るく振る舞われ、仕事を続け弱音を吐く様なことはありませんでした。検査で病状の悪化がわかり入院することになった際も、取り乱すことなく淡々とされており、入院中に先生のお兄さんが見舞った際にも、動じることなく「思うことはやりきり、悔いのない人生だった。」とおっしゃったそうです。そこには天職を全うしたという自負心とともに、先生の鷹揚とした人柄と、時折みせる繊細な気配りが感じられ、自分が実際に鈴木先生と同じ立場になった場合、同じように振る舞えるかと考えさせられました。

鈴木先生が文教大学で 21 年間の長きにわたって、心血を注ぎ学生の指導にあたられ残した足跡は大きく確かなものであり、これからも消えるものではありません。鈴木先生、本当にありがとうございました。これからの鈴木先生の旅が安らかでありますよう、心からお祈りいたします。

(くほむら りせい 文教大学教育学部学校教育課程美術専修主任)